

# 論文要旨

## 酪農の持続的展開条件に関する研究

—日本とバングラデシュの事例研究—

### Study on Sustainable Development Conditions of Dairy Farming

-Case Study of Japan and Bangladesh-

日本においては高度経済成長期以降、牛乳・乳製品や食肉の消費が伸びた。なかでも1970年代頃から牛乳・乳製品の消費が急速に伸び、それに対応して国内の酪農が発展した。他方、その間、米消費は漸減した。しかし酪農も含め、日本農業は全体として後継者不足に直面した。そのような中で、酪農は農業全体を上回る速度で離農が進んだ。こうして離農率がとりわけ高い酪農の将来動向が注目され、将来展望に関する研究が改めて求められている。

そこで本研究は、佐賀県の事例を通じて、酪農の離農率の高さや階層分解の急伸を確認したが、後継者問題に関しては、小規模層での後継者の欠如に対し、中・大規模層でのその高い比率での確保実態を確認し、将来における中規模経営の大規模化を展望しえた。また少なからずの後継者が酪農関係の大学・短大卒であることを特徴的な事柄として指摘し、将来展望における積極面として評価しえた。さらに少数だが頭数規模に規定されずに乳製品加工・販売を手掛けて成功している事例も確認でき、酪農家の6次産業化の可能性を提示した。

他方、バングラデシュでも直近の過去30年間の経済成長過程においてGDPに占める農業のシェアは低下したが、農業の中で畜産の占める割合は高まり、1973/74年の7.6%が98/99年には12.9%に達し、2020年には19.9%に上昇すると推測されている。それは1973/74～98/99年に畜産の伸びが5.25%で、その他部門の伸びが1.7%だったからである。

バングラデシュでは生乳生産量が1987/88年の129万トンから97/98年には162万トンへ、更に2001年には174万トンに増加したが、粉ミルクの輸入量の激減も作用して、増加する需要量に追いつかない状況が続いている。牛乳の所得弾力性は肉や卵のそれより高いこともあり、目下、増大する牛乳需要量に対し生乳の更なる国内生産量の増加が求められている。

ところで、バングラデシュでは多くの農家が生乳の自家消費と農耕を目的に乳牛を飼養し、まさに有畜複合という経営形態を取り、また農家の乳牛飼養頭数規模は零細であり、さらに自給的生産を行っていることが酪農業の特徴となっている。

こうして、バングラデシュでは国民生活上においても農業内においても酪農の役割と比重が大きいため、酪農の将来への発展方向性を追求することが重要な課題となってきている。

そこで、一般的・伝統的な酪農地帯と新たな取り組みを見せている酪農地帯における酪農家の調査を行った結果、少なからずの酪農家において女性が主要な働き手となっていること、そしてそのことを通じて彼女らが経済的・社会的地位を向上させ、生活面では食生活向上や子弟教育高度化、生産面では投資増加による頭数拡大に貢献していることが確認された。また、上述の有畜複合経営ゆえの資源循環による経費節減・所得向上効果も確認された。

他方、零細自給的経営ゆえに技術面、経営面および販売面において弱点を保持しているため、目下、政府の支援を得た融資や生乳協同加工販売組織への参加が進められており、今後のバングラデシュ酪農の持続的展開条件の1つの重要なものとして理解することができた。